



和歌山の子どもに自信と誇りを

- ・ 教科に関する調査において、小中学校すべての調査で、県平均が全国平均を上回る。
- ・ 児童生徒質問紙調査において、授業の内容が「よくわかる」「どちらかといえば、よくわかる」という児童生徒の割合を平成26年度調査より3ポイント以上向上させる。

これらは平成27年度、今の6年生が4年生だった頃の話です。和歌山県教育委員会は、この2点を全国学力・学習状況調査の2年後の目標としていました。

平成26年度の結果は、和歌山県は小・中学校ともに何れの教科、何れの領域においても全国平均を下回り、特に小学校では国語Aが、中学校では国語Bに大きな開きが見られました。また、子どもの生活の状況の結果からは、授業のめあてや振り返り、あるいは授業中の「話す」「書く」活動についてあまりできていないとの回答が多く見られました。

「責任の所在を明らかに」という言葉を耳にしますが、これら2点の目標が挙げられていた【和歌山県学力向上対策中期計画】では、『県教育委員会・市町村教育委員会・学校が自らの責務を明確にしてー』と明言されており、当然、われわれ現場の者に対してもその責任がきちんと示されています。それは、基礎的基本的な事項の習熟（本校で言えば四箇郷タイム）や読書活動の推進（同じく図書館活動や読書タイム）、あるいは継続的な補充学習（同じく放課後の学習や夏休み学習会）などで、市内各校もいろいろな形で実施していることでしょう。しかし大事なものは、形式だけを取り入れていないかどうか、となりのクラスと同じかどうか、さらには当初の通り続けているかなど、その辺りは本校についてもきちんと検証する必要があります。

以前、研修会がありました。そのときの講師先生曰く、『各家庭の背景と子どもの学力とは相関（そうかん：二つのものが密接にかかわり合っていること）がある』と。ゆえに『公立学校は、家庭の背景を学力格差に反映させないこと』が使命であるとのこと。このときも学校と家庭の役割と責任の話から講演が始まりました。

担任からの宿題の出し方、学習に対する保護者の価値観、子どもの勉強への姿勢、そして日ごろの授業の在り方等々、いろんなことが組み合わさって絡み合って学力は身についていくものです。【和歌山県学力向上対策中期計画】のサブタイトルには、[和歌山の子どもに自信と誇りをもたせ、成果が実感できる教育を実現する]とありました。四箇郷の子どもたちの自信や誇りを傷つけないためにも、互いの責任を果たしていかなければなりません。それが四箇郷の子どもたちにかかわる私たち大人の責務と言えるでしょう。